



エボラ出血熱の正しい知識を住民たちに伝えるために作成したポスターとパンフレット

朽化した住民が行きたがらないこと、母子だけのための施設だと思われて男性が来ないことなど、さまざまな理由が重なっている。しかし本来、センターは全ての人々の健康促進に役立つ拠点になるべき。ラゴス州保健省は2009年からセンターの活用促進に力を入れ始め、古閑専門家らも15のセンターで助産師の技術向上や5S※を取り入れた施設内の衛生状態の改善に力を入れてきた。

さらに多くの人にセンターを利用してもらうためには、2014年から州の中でもスラムのあるエチ・オサ地域で活動することになった。センターで患者が来るのを待っているのではなく、保健スタッフがスラムに出張して保健医療サービスを提供する仕組みを浸透させようと古閑専門家は考えていた。

その矢先に起こったのが西アフリカでのエボラ出血熱の拡大だ。古閑専門家も共に活動する松岡貞利専門家も、何を優先的に取り組むべきか、州保健省の担当者や話し合いを重ねた。そうして分かったのが、感染者の早期発見や治療が行われている一方で、住民への

情報提供が十分できていないこと。「予防には塩水を大量に飲むといい」といった間違った情報まで広まっていた。保健医療サービスが届きにくいスラムでこそ、感染症の正しい知識を伝える啓発活動が重要になる。住民自身に知識があれば、感染の拡大や症状の悪化を抑えられるからだ。そこで州保健省の職員と共に、エボラ出血熱の正しい予防策や感染時の対応を伝えるパンフレットとポスターを英語と現地語で作成し、センターや学校に配布した。

その努力の甲斐あって、約3カ月という短期間でエボラ出血熱の終息宣言が出されたナイジェリア。「州保健省の対応の速さには今後の可能性を感じさせた」と古閑専門家は期待する。「ナイジェリアの人々は感情の起伏が激しく、活動する上で大変なことも多い。それでも、いったん信頼関係を築くと、共に全力を尽くしてくれます。州保健省のヤワンデ・アデシナ知事保健補佐官



地域の保健スタッフを対象に研修を行い、日本での5Sの歴史などを伝える古閑専門家



プライマリー・ヘルス・ケア・センターに来た子ども連れの母親に、川勝義人専門家がどんなニーズがあるかインタビュー

※整理・整頓・清掃・清潔・しつけの略。

スラムでの出張保健サービスとして、保健スタッフがお店の軒先を借りてビタミンAの投与を実施

住民に身近な保健医療の拠点を目指す

豊富な石油資源を持ち、アフリカ最大ともいわれる経済規模を誇るナイジェリア。経済の中心地であるラゴス州は、約2000万もの人々が住む大都会だ。しかし、その発展の恩恵が全て

の人々に届いているわけではない。さらびやかな発展の傍らで、ラゴス州にはガーナなどの隣国から仕事を求めて集まってきた人々が暮らすスラムも多い。ごみが散らばり、排水施設がないため汚水がたまって下痢やマラリアなどの感染症が広がることもある。また、自宅での出産時に命を落とす妊産婦

も多い。全ての人々の命を守りたい。この国で活動して8年、そんな思いで奮闘しているのが古閑純子JICA専門家だ。「基礎的な保健医療サービスを受けられる公的施設として、プライマリー・ヘルス・ケア・センターが各地にあります。予防接種や産前・産後健診などの

母子保健を中心に、5歳未満の子どもやお年寄りには無料で診察を受けられます。誰でも利用できる最も身近な施設のはずなのに、なかなか使ってもらえないことが課題です」と話す。その背景には、ナイジェリアではハーブなどを使った伝統医療が根強いこと、センターの設備が老



CASE 3

地域で命を支えるために

経済発展の陰で生まれるさまざまな格差。保健医療サービスもその一つだ。貧困層の人々がより健康に過ごせるよう、日本と共に地域での仕組みづくりに取り組んでいるのがナイジェリアだ。



from ナイジェリア
Nigeria



エチ・オサ地域にはビニールシートを被せた粗末な小屋が立ち並び、雨期にはあちこち水浸しになり、衛生環境は劣悪だ